

1 飢饉

先々週、六月七日から、創世記によって、アブラハムの人生を、改めてご一緒に辿り直しているところです。

先週は、アブラハムが、七五歳のとき、神の新たな召命を受け、それに従って旅立った、そして示されるままにカナン地方、今のパレスチナにやってきた、そこまで見ました。

カナンに入ったアブラハムは、聖書（二二・一～九）にあるように、その所々で「祭壇」を築いています。

祭壇というのは、犠牲を捧げるための何らかの施設ですが、同時に土地の所有、つまり縄張りを主張するものでもあったと考えられています。祭壇はつくったけれどアブラハムはまたすぐ移動を余儀なくされています。というのも、そこは無人地帯ではなくて、すでにカナン人が住んでいたところだったからです。祭壇を築くことによつてそうした先住の民とのあつれきが強くなって、移らざるをえなくなった、というのが真相ではないかと思えます。

こうして、この前見た最後のところで、アブラハムは、カナン地方から、さらに南下し、ネゲブ地方へと移って行くこととなります。彼らはまさに寄留者です。そのネゲブで飢饉が発生します。

その地方に飢饉があつた。アブラムは、その地方の飢饉がひどかつたので、エジプトに下り、そこに滞在することにした（一〇節）。

ネゲブは砂漠で、もともと農作は困難なところです。飢饉は激しく、生活をつづけに行くことができなくなります。もといたハランに戻るといふ選択枝は、おそらくなかつたでしょう。アブラハムは、ネゲブのその先、エジプトへと移動していくことになるのです。

旧約聖書で、飢饉という言葉、あるいは飢饉という事態の発生が語られるのは、ここがはじめてです。

ただ、これ以後、飢饉という自然災害が、イスラエルの歴史を大きく動かし、変えていったことが思い起こされます。今は詳しく申し上げる時ではありませんが、アブラハムの子イサク、その子ヤコブ、彼ら族長たちはみな飢饉に苦しみ、多くは、豊かなエジプトへ避難しています。彼らは一介の寄留者というより、いわば難民として逃れの場所へ移って行ったのです。飢饉は、まさに生存か死か、生死の問題だったといふことを記憶しておきたいと思えます。

エジプトは、当時も、そして今も、この地域最大の国であり、強大な権力に支配された領域でした。さすらいの一部族に滞在の権利があるわけではない。保護を当てにできるわけでもありません。何か策略を使うしか、そこでも生き延びるすべは、ある意味でないのです。いよいよエジプトに近づいたとき、アブラハムは妻サラにこう言ったのです。

あなたが美しいのをわたしはよく知っている。エジプト人があなたを見たら、「この女はあの男の妻だ」と言って、わたしを殺し、あなたを生かしておくに違いない。どうか、わたしの妹だ、と言ってください。そうすれば、わたしはあなたのゆえに幸いになり、あなたのお陰で命も助かるだろう（一一b〜一三節）。

ここでアブラハムは妻サラに「わたしの妹だ」と言ってくれと言っていますが、じつはこれは半分当たっているのです。サラは母親の違う彼の妹で（二〇・一二）、のちの律法では結婚は許されないので（申命記二七・二二）、この時代は認められていたようです。

ですから妹だと言うことは、半分真実です。しかし言うまでもなく、これは偽りであり、だましです。アブラハムがしていること、しようとしていることは、妻が犠牲になることがあっても、自分の「命」は助かるようにする、自分の幸いは確保するということだったのです。

神の声に聞き従って出で立った人アブラハムはもはやここにはいません。ここには行く先々で、所々に祭壇を築き、主なる神の名を呼んだアブラハムはすっかり姿を消しています。

この箇所のアブラハムについて「利己主義」という題をつけて解説しているのがあります（ギブソン）。その通りだと思えますけれど、私は、むしろ神を忘れたアブラハムとでも言いたいと思います。

2 偽り

さてアブラハムはエジプトに入ります。予想通りのことが起こります。エジプトでは大騒ぎです。アブラハムの策略は成功します。騒ぎは、やがてエジプト王宮にも聞こえて行きます。同時に、アブラハムが一番に恐れていたことも、エジプト王ファラオの宮廷では進行していたのです。

アブラムがエジプトに入ると、エジプト人はサライを見て、大変美しいと思った。ファラオの家臣たちも彼女を見て、ファラオに彼女のことを褒めたので、サライはファラオの宮廷に召し入れられた。アブラムも彼女のゆえに幸いを受け、羊の群れ、牛の群れ、ろば、男女の奴隸、雌ろば、らくだなどを与えられた（一四〜一六節）。

アブラハムにはもともと財産があつて、財産といつても家畜ですが、比較的裕福な生活をしていました。カナンに移ってくる前、ハランで成功したのです（五節）。ここでさらに「羊の群れ、牛の群れ、ろば、男女の奴隸、雌ろば、らくだなどを与えられ」て、いっそう豊かになります。らくだが飼育動物になるのはもつと後の時代という説もありますが、ここで「らくだ」も加えられたのは、非常に豊かさになったことのあるしと受けとることができます。

しかし同時に彼の恐れていたことも、起こってしまったのです。サラを妹だと偽ったとき、最悪何がおこるか、アブラハムも予想していなかったわけではないと思いま

す。サラの美しさはエジプト人の間で評判になっただけではない。王宮の家臣たちも、彼女を見て、ファラオの前で褒めそやしたのでファラオは彼女を後宮（ハレム）に入れ、「妻として」（一九節）召し入れることになったからです。結果的にアブラハムは妻を他の男に売り渡してしまったのです。

そもその策略は成功した。彼は、飢饉の中で、かえってその富を増した。しかしそれによってアブラハムとサラの関係は根本的に壊れてしまったと言わなければならぬのではないでしょうか。

3 逃れの道

アブラハムはギリギリの選択をしながらここまでやって来ました。神を忘れてしまったなどと、勝手な、父祖アブラハムに失礼な言い方をしましたが、彼が神を忘れることはありえないことです。ただ、ともかく自分の知恵を先立たせて、自分で必死になって苦境を打開しようとしたことは確かです。その間も、アブラハムの神が彼とずっと共にいたことは間違いありません。

ところが主は、アブラムの妻サライのことで、ファラオと宮廷の人々を恐ろしい病気にかからせた。（一七節）。

はじめて神が現れます。「ところが主は」です。主なる神です。アブラハムが忘れてしまっていたかに見えた神です。アブラハムを召し出し、彼を祝福の基と定めた神です。アブラハムのすべての行動に、じつはずっと関わっていた神がここではじめて現れるのです。

この神が「アブラムの妻サライのことで、ファラオと宮廷の人々を恐ろしい病気にかからせた」というのは、今日の聖書箇所が一番分りにくい箇所です。というのも偽りを言つて、あるいは言わせて騙そうとしているのはアブラハムであり、道徳的には問題だと私どもには思われるからです。その彼に禍が下されるのであれば、私どもも少しは納得するのに、禍がファラオと宮廷の人々に起こります。どうしてファラオに？ どうして宮廷に？ 当然の疑問です。ファラオは、サラが原因で禍が起こったと悟ったようです。どういふふうにして知ったかは分かりません。そこでアブラハムを呼び寄せこう言います。

あなたはわたしに何といたことをしたのか。なぜ、あの婦人は自分の妻だと、言わなかったのか。なぜ「わたしの妹です」などと言ったのか。だからこそ、わたしの妻として召し入れたのだ。さあ、あなたの妻を連れて、立ち去ってもらいたい（一八〜一九節）。

ファラオがサラを自分の「妻として」召し入れた、それは事実です。しかしそれは、自分の欲望からしたというようなことではなかったように見えます。サラを後宮に召し入れるように動いたのは家臣たちでしたし、他人の妻だと知っていたら、しなかつたことだからです。ですから神が恐ろしい病気にかからせたというのは悪事を裁いたというのではない。そうであるならそれは、サラを解放するための神のやり方だった

